

あの日から願い続けた、平和な世界を

日本軍の真珠湾攻撃により始まった太平洋戦争。沖縄は唯一の地上戦の地となり住民を巻き込んだ激しい戦いは、多くの尊い命を奪っていききました。終戦から76年が経過した今、当時のことを語りえる人は年々減少しています。今回は、市内に住む島袋文雄さんへ当時の話を聞きました。

取材▼秘書広報課 電話 862・9942



元那覇市教育史編集主任を務めた島袋文雄さん(92歳)

少年たちの任務

当時、私は14歳で母と祖父の3人で今の前島付近で暮らしていました。戦争が始まった時、私は沖縄県立一中(現在の首里高等学校)へちようど進学したばかりで、勤労学徒として塹壕掘、防空壕掘、港で軍の物資引き上げや砲弾運びなど、作業に終わる日々でした。体力勝負だったので、14歳の少年にはとても大変でしたね。自分より年上の中学校2年生以上の先輩たちは少年兵として、戦場に駆り出されていましたよ。



沖繩県立一中在學生(昭和19年5月15日撮影)
(左上)島袋文雄さん
(右上)元那覇市長の親泊康晴さん
(左下)久高安進さん、(右下)比嘉彦光さん
那覇市市制100周年記念誌より転載

降り注ぐ砲弾の雨

昭和19年10月10日午前7時、私はいつものように港へ行き物資の引き揚げ作業を行っていました。ちょうど現在の沖縄製粉株式会社のあたりです。ふと空を見上げると、上空を米軍の飛行機が飛んでいるのを見つけた。「演習かな?」と思っていると、近くにいた将校が軍刀を振り回し「壕に隠れなさい!」と大きな声を上げたので、あらかじめ準備していた防空壕へ急いで逃げました。壕といっても掘った穴の上にトタンを乗せ、上から土をかぶせた簡単なもの。砲撃されたらすぐ吹き飛んでしまいそうでした。いつ砲弾が落ちるか、爆発音を聞くたびにぶるぶる震えながら飛行機が去るのを静かに待ちました。しばらくして、砲撃が止んだのを確認し、急いで家に帰りました。今のバスセンターのところから、那覇高校、壺屋を通り自宅のある前島まで一生涯命走りましたよ。無事に自宅に戻りましたが、焼夷弾により自宅は全焼。住む場所を求め、家族全員で浦添の沢岬に向け避難しました。



▲10・10空襲、猛火に包まれる那覇(那覇市歴史博物館提供)

奪われた家族

浦添に移動する間も米軍の攻撃は止まず、城間の海岸沖には黒船のような米軍の大きな軍艦が海岸線を埋め尽くし、上空を偵察機が飛んでいるのが見えました。当時、日本には無線機もなく米軍との力量の差は歴然。海からも空からも沢山の砲弾が降り注ぎとても恐ろしかったのを覚えています。米軍が北から迫っていたため、識名から山川、大里を通り南部に向け逃げました。途中、首里の大名付近で、首里城が赤い炎を上げ燃えているのを見ましたよ。砲撃から身を守るため、岩場に身を隠しながらなんとか糸満の真栄平に到着。よそから来た私たちはどこに壕があるかわからず、集落にある民家に身を隠しました。私たちがいる家の側の畑に砲弾が落ち、人間の本能か私はとっさに家を飛び出し、近くにあった畑の溝へ隠れました。家に戻ると逃げ遅れたのか、母は家の前の道路で、祖父も少し離れたところで亡くなっていました。一人ぼっちになった私は、悲しくて涙が止まりませんでした。あの時は自分を守るので精いっぱいでした。

喜屋武から小波蔵、伊原へ移動し近くの馬小屋に避難すると、中には既に日本兵とひめゆり学徒隊と思われる女性が数名いました。そして、忘れもしない6月22日。米兵につかまるのを恐れたんでしょうね、米軍の自動小銃のパラパラという音を聞いた女性と日本兵が、私の目の前で手榴弾により自ら命を絶ったんです。私の顔には彼らが放った手榴弾の無数の破片が刺さり血だらけになりましたが、とにかく生きるために必死でした。夕方のわか雨が降るなか、波平のサトウキビ畑の中でじっと動かずに隠れている

逃げた先に



と、近くでガサガサという音と共に、英語の話し声が聞こえてきました。そして、ついに私は米兵に見つかりました。当時、着ていた服は軍人と同じカーキ色の服だったため、少年兵と間違え撃たれるのではと焦り、着ていた服を脱ぎ捨てパンツ一枚になり左手を挙げ米軍の前に行きました。約3か月もの長い期間砲弾が飛び交う中を震えながら生き抜いてきたので、米兵に見つかった時は、死への恐怖よりも「逃げきれない」という諦めの気持ちの方が大きかったと思います。

平和な世界を願って

終戦から76年が経ちましたが、あの時の事は今でも鮮明に覚えています。家族と過ごしていた何気ない日々が一変、地獄のような毎日になりました。今では想像もできない程壮絶でしたよ。戦争で亡くなった母と祖父に見守られ、今日まで生きることができました。

戦争というのは本当に残酷なもので、たくさん大切な人を奪っていきました。月日が経つにつれ戦争を知らない世代が増えていくと思いますが、これからも自分の体験したことを伝え続け、平和な世の中になるよう社会に訴え続けていきたいと思っています。

戦争下の社会情勢

昭和16年(1941年)

12月8日 日本軍がハワイの真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が開始

昭和19年(1944年)

8月22日 沖縄から本土への学童疎開船対馬丸が悪石島付近で米潜水艦の攻撃を受け沈没

10月10日 米軍による南西諸島への空襲により那覇市の約90%が灰燼に帰す(10・10空襲)

昭和20年(1945年)

3月6日 国民勤労働員令が公布され、沖縄県の15歳から45歳までの男女を動員

3月23日 米軍が沖縄本島への爆撃を開始する

3月26日 米軍が慶良間諸島に上陸し、地上戦が開始
*その後、読谷、嘉手納、北谷と次々に上陸

4月25日 米軍が沖縄本島北部の約75%を占拠

5月14日 第32軍は経塚・沢岬の陣地から後退し、首里へ戦線を縮小する

5月27日 第32軍司令部は首里から南部の摩文仁へ撤退を開始

5月31日 米軍が首里を占拠

6月23日 第32軍司令部の牛島司令官が摩文仁の司令部洞窟出口付近で自決

6月25日 沖縄戦における日本軍の組織的作戦の終結を公表

8月4日 米軍の沖縄本島北部における掃討戦を終了

9月7日 米軍司令官との間で無条件降伏文書への調印がなされ、沖縄戦は公式に終結する

出典:『総史 沖縄戦』(著者 大田昌秀)